

もう日1日と遠ざかり。次回は1943年に又観る積りです。宵の西空には金星木星土星が巨光を放つてゐますが、木星は昨秋以來北赤道帯一帯が青色をおび、時に赤色が強くなる事もありましたが、非常に複雑の様です。同封の木、火星スケッチ充分御笑覽下さい。

金星も大變南半球の白冠が良く目立つ様です。166耗鏡も今後遊星面を大いに専用とする次第です。

(一月16日)

(保積善太郎)

編 輯 後 記

インチを棄てよ！ ドイツに習つて、メートル法に徹底せよ、大東亞圏の指導者たるべき我々が、英米の尺度から縁が切れないとあつては、面目無い話です。今後本誌上に於いては、インチやマイルを絶対に用ひませぬ。又、若し原稿中にインチやマイル等が書かれてあれば、編輯室では之れを換算して上げます。●エイトケン博士の“白色の矮星”は、譯文ですから、少々ギョチないですが、しかし、學界の珍星を解説したものですから、ゆつくりと、味はひつゝ讀んで下さい。水の何千倍、乃至、何十萬倍といふ密度の持ち主である此等の星々は、地球上の物理學者や化學者が全く了解し得ない現代の七不思議の一つですが、ひとり天文學者の手によつて、こうした超物理學が解かれて行くのです。●山本會長の星座の研究文は、これからも續々出る筈です。熟讀願ひたい。星座のことなどは、もはや卒業して了つたと思つてゐる會員が多いかも知れませんが、しかし、決して早合點してはなりません。星座には、まだまだ研究すべき問題が澤山あるのです。この號の會長の文を見ても、例へば、星座の邦譯名の問題などに、明快な指示が與へられてゐます。と同時に、又、“オヤ々々さうなのか?!”と思はせられる事が所々に見られます。次號には“學者の忘れてゐる星座”が連載されます。●畝川氏の妙見星の記事など、他にもいろいろあることと思ひます。日本内地のみならず、大東亞圏のあちらこちらから新材料を拾ひ出すやうな専門家も、追々現はれて貰ひたいものです。●ガリレオ傳は愈々妙境に入ります。學界の奇人として、三百年の昔から毀譽褒貶の渦中に置かれてゐる此のガリレオの、之れは最も嚴正公平なる解説であります。悪魔か、學聖か、狂人か、天才か?。盟邦イタリヤが生んだ此の名物男の正體と其の正しい批判を、其の死後300年の今日、靜かに味はつて見ることも、興味あるわけです。このガリレオの如き、波瀾の中の學者が、昭和の今日も、尙、どこかに見出されないでもありますまい。そして、世間は此の如き學者を、如何に待遇しあるか?! (T)